

漫画家にはなぜか旧満州出身が多い

——神田さち子さんを支援するちばてつやさんらが南京で展示会——

右の記事は、09年4月5日の朝日新聞に掲載された記事である。ちばてつやさん、森田拳次さんのお二人とも、旧満州出身者だ。ちばさんは、神田さち子さんの「帰ってきたおばあさん」を支援されている。07年9月、銀座の博品館劇場での上演では私も見に行ったがその日、ちばさんも観劇されていた。ロビーで私もちばさんと少しお話し、方正のことをお話した。

ちばさんは、神田さんによれば「帰ってきたおばあさん」の「台詞を語ることができる」ほど、舞台を見て感激され、それ以来のお付き合いだそうだ。

ここに一冊の本がある。『ボクの満洲 漫画家たちの敗戦体験』（中国引揚げ漫画家の会編）だ。登場する漫画家は、お二人のほか、赤塚不二夫、北見けんいちさんなど9人の漫画家、そして漫画評論の石子順だ。北京生まれの横山孝雄、上海で育った高井研一郎を除けば、全員旧満州で幼少期を過ごしている。参加者は、それぞれ体験談を綴り、漫画も描かれている。

ちばさんは、昭和14年（1939年）生まれ。「ぼくの満州放浪記」と題された文章には、こんな個所が出てくる。<関東軍の戦車を奉天（瀋陽）の通りで見たことがある。関東軍が日本を助けにきたと思って、我々はもうありったけの食糧を、そのころはあんまり食糧がなかったのに、保存していたカボチャなんかを、「兵隊さん頑張ってください」と言って、兵隊さんにあげた。終戦になる直前のことだった。その戦車は、要するに我々をほったらかして逃げるところだった。その逃げる兵隊に、知らないから戦ってくれにきたんだと、我々を守ってくれる、とっていたわけだ。兵隊が戦車の上に上半身を出して敬礼していた。我々は日本人街から出てきて、拍手と歓声で見送った。今想えば、「ごめんね」と言うつもりだったのだろう。あの敬礼は。>とある。

森田拳次は「ぼくの満引き物語」でこう記している。<昭和五十六年（1981年）、第一回中国残留孤児肉親さがし訪日調査団が新聞の社会面をにぎわしたころ、孤児たちの年齢や顔を見ると、「ひとごとではない」と感じた。自分に近い年齢だし、ぼくは、弟を五円で買ってきた中国人も見ている。売られていった日本の子どもたちと視線を交わしたこともある。ぼくらが、あの欄に出る出ないは、本当に紙一重であった>

旧満州体験者も本当に少なくなっている。南京での展示会の成功を祈りたい。

（大類善啓）



戦争体験を絵などで記録する漫画家や文筆家らの「私の八月十五日」の会（森田拳次代表）が4日、終戦日の記憶を描いた絵や文章を、中国・南京市の南京大屠殺記念館で8月に展示すると発表した。会のメンバーは、すでに国内で終戦日の記憶をつづつ記者会見するちばてつやさん（右から2人目）、森田拳次さん（同3人目）ら。東京都内のホテル

終戦日の記憶、南京展示へ

8月、漫画家・ちばさんら

た画集を出しており、その原画や文章の中国語訳を中心に百数十点を展出する。森田さんらの呼びかけに応じ、悲惨な戦争の庶民の体験を次の世代に伝えようと、メンバーらが描いたり書いたりした。展示は8月15日から特別展示場で行われる予定。絵を出品する漫画家のちばてつやさんは「我々も生死をさまよった。南京へ行って、南京の人たちと戦争とはどういうことか、戦争に巻き込まれるとはどういうことか、話してみたい」と語った。作家の石川好さんは「民衆の戦争体験を共有することが、和解につながる」と話した。